札幌の冬の風物詩

ササラ電車

冬も走り続ける市電。いつもスムーズに運行できるように活躍しているのが、除雪車の「ササラ電車」です。一技師のユニークな発想から生まれたこの電車。その歴史をたどります。

札幌に初めて路面電車が走ったのは大正七年（一九一八年）。冬の路線をどのように確保するかが大きな課題でした。たくさんの雪が降ると人力などで除雪をしましたが、追いつかず、電車が立ち往生することもしばしばあったようです。そんなときは、馬そりでお客さんを運んでいました。

そのような中、十四年（一九二五年）に「ロータリーブルーム式電動除雪車」（ササラ電車）が実用化されました。当時経営していた札幌電気軌道株式会社の技師長、助川貞利（すけがわさだとし）氏が三年間にわたって研究し、できたものです。台所で使われていた竹製のたわしの一種、ササラがヒントになりできたこの除雪車。車体は木造から鉄製に変わりましたが、竹の反発力を利用し雪を掃き飛ばすアイデアは、現在にも引き継がれています。

一時はこのほかに「プラウ式電動除雪車」も活躍していました。これは軌道の上の雪をかき分けるだけのもので、レールに雪が残るため、今はササラ電車だけになっています。ササラの原料は、モウソウ竹が使われています。山口県の福栄村で、農閑期の主婦たちが作る特別製のササラは長さ約三十センチ、直径三・五センチ。規格は昔から変わっていません。

レールに積もった雪を掃き飛ばすためにササラ電車が出動するのは、毎朝四時半。雪が降っているときは日中も走ります。冬の風物詩、ササラ電車は、市電を守る頼もしい存在です。

（平成九年二月号・第三十六回）

ササラ電車（昭和35年撮影）
札幌市写真ライブラリー所蔵